

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 齊藤史朗

本論文は、家理論を代表する 5 人の社会学者、戸田貞三、鈴木栄太郎、有賀喜左衛門、喜多野清一、中野卓の社会像と政治観を、徹底したテキスト・クリティークに基づいて明示するとともに、家を非政治的なものとして理解する学説史的な枠組みがなぜ成立したかを論証する試みである。

第 1 章では、政治、社会像、政治観の定義がなされる。戦前の戸田、鈴木、有賀の家理論は、家とその外部システムの関係を問うている点で非政治的ではない。にもかかわらず、それらが非政治的であるという理解が、いつ、どのように成立したかを分析するために、彼らの家理論を戦後に継承した喜多野と中野の社会像や政治観を分析する必要が説かれる。

第2章では、家族成員の精神的融合を強調し、いっけん非政治的にみえる戸田貞三の家理論が、戦前には国家主義に、戦後はリベラルな社会理論として融通無碍に解釈される性質を持つことが明らかにされる。第3章では、「家の精神」を強調したとされる鈴木栄太郎の家理論が、実際には、家督相続における兄弟姉妹の平等な権利や政治参加の重要性を強調する理論であったことが指摘される。しかし鈴木の家理論は、人々に政治への過剰な参加を強いて、のちに体制への包摂を意味するようになったという、重要な指摘がなされる。第 4 章では、有賀喜左衛門の家理論が、親方子方関係を公法的＝政治的なものとの対抗によって生み出されたことを指摘し、家を自然災害や政治権力からの防波堤と考える点で、政治と深く関連することが示される。

第 5 章では、家理論を戦後に継承した喜多野清一が、戸田の家族本質論に強く依拠し、近親者の感情的融合を重視したがゆえに、家成員に非親族を含めることを否定したことが指摘される。また喜多野は、鈴木の家理論についても、議論の背景にある実践的意図について考慮しなかった。そこから戸田や鈴木の家理論を非政治的なものとして理解する枠組みが形成されたことが明らかとなる。第 6 章では、非親族を家の成員に含めるかいなかをめぐり有賀・喜多野論争において、中野卓は、非親族を含める有賀の家理論を擁護した。しかし中野にとって家の本質は家族成員間の心のふれあいであり、生活を政治から切り離された領域として扱う傾向が強く、師匠である有賀の家理論を非政治的に読み解く傾向を有していたことも明らかとなる。

第 7 章では、家理論を非政治的に理解する枠組みが成立した要因として、第一に、各々の家理論が有する特性(例:社会変動への適合のしやすさ)、第二に、戦前の家理論を非政治的なものと解釈する戦後の社会学者の議論が影響力を有したこと、第三に、政治的な議論を忘却する戦後社会の特質が指摘されている。

審査の過程では、各論者の原典を広く渉猟する姿勢、後世の論者によって見失われた論点を再発見する姿勢などには高い評価が得られた。「非政治化」という概念の多義性や、全体を貫く理論枠組みの設定に関して改善の余地があるが、本論文が、家理論の学説史的研究の水準を大きく高める研究であることに疑いはなく、当審査委員会は、本論文が博士(社会学)の学位授与に値するという結論に達した。